平成19年3月1日

AkayanoMORIDAYORI

赤谷の森だより

AKAYA PROJECT

赤谷プロジェクト地域協議会
(財)日本自然保護協会
赤谷森林環境保全ふれあいセンター

第4号

赤谷の森の最高峰（仙ノ倉山）

コラム＊赤谷の森から

晩秋の小出俣林道を歩く

赤谷プロジェクト地域協議会
林　泉

思いがけなくクマタカが現れ、上空を旋回し林道の対岸にある樹上に止まった。姿を見せること自体珍しいことだとガイド役の人が教えてくれた。

さる晩秋の一日、この春頃から実施したいと考えているハイキングツアーの下見を兼ねて、赤谷の森の奥に通ずる小出俣（おいずまた）林道を歩いてきた。運営方法や安全面等について一通り確認できたので、多くの人々をこの森にご案内できればと期待している。

ところで、この地域のなかでも注目すべきは、東京発電の調整池上流にあるカラマツ林を伐採した場所であろう。ここでは新たに植林することなく、長い時間をかけて天然林に戻していく実験が行われようとしている。逐年の変化を追跡調査しながらどのように植生が回復していくかを調べるわけである。毎年どのように変化していくかを直接確認できるわけで、赤谷プロジェクトの目的からも興味深いポイントとなろう。

また周辺には炭窯の跡がいくつかある。天井部分が残ったものもあり、その規模の大きさや築造技術に目をみはらされる。

さらに進むと千曲（せんげん）平と呼ばれる場所に出る。そこでは渓畔林（けいはんりん）とよばれる渓流沿いに特有の森林の姿を目にすることができる。近くにあるカツラの巨木とあいまって、是非とも案内したい場所である。一方で手入れの行き届かない杉林なども周辺に残されている。ありふれた森の姿に埋もれて、古くから人間が自然とかかわりながら暮らしてきた痕跡に気づかされる。ガイドの話を頼りに、この森の過去から未来の姿に思いをはせた。

赤谷プロジェクト紹介

”赤谷プロジェクト“皆さん、お聞きになったことがありますか？

赤谷プロジェクト（正式名称は三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画）は、みなかみ町北部（旧新治村）の新潟県との県境に広がる国有林「赤谷の森」を、地元住民で組織する「赤谷プロジェクト地域協議会」、「(財) 日本自然保護協会」、「林野庁関東森林管理局」の３つの機関が中核団体となって共同管理していくプロジェクトで、平成16年度から始まりました。

今回の「赤谷の森だより」は、赤谷プロジェクトのことを詳しくご存じない方も多くいらっしゃると思いますので、赤谷プロジェクトの概要についてお伝えしたいと思います。

赤谷プロジェクトはみなかみ町北部の稲包山から三国山、平標山、仙ノ倉山、万太郎山に続く稜線の群馬県側に広がる国有林を、地元の視点、自然保護の視点、そして森林管理・行政の視点を持つ３つの機関で共同管理していくプロジェクトです。このように国有林を様々な立場の人たちで共同管理するのは全国でも初めての試みで、その動向が注目されています。

この「赤谷の森」と呼ばれているプロジェクト活動地域は、約1万ヘクタール（10km四方）の国有林で、６つのエリアに区分されています。（図1参照）

図1）赤谷の森　エリア区分図

例えば、「赤谷源流エリア」（エリア１）は原生的な自然を維持し回復・復元することを第一に考慮しており、「小出俣エリア」（エリア２）は、人工林を自然林へ移行させる試験地や環境教育の場として活用しています。また、「法師沢・ムタコ沢エリア」（エリア３）は地域の水源・温泉源であることから水源の森としての機能回復・復元を考えます。

さらに、旧三国街道を含むエリア４では理想的な自然観察路とするための森づくりを考え、人里に近いエリア（エリア５・６）では森林の活用を通して生き物のくらしやすい森づくりを目指します。

赤谷プロジェクトでは「赤谷の森」を共同管理して行くにあたり、２つの大きな目標を掲げました。それは、

1. 生物多様性の復元
2. 持続的な地域社会づくり

「生物多様性の復元」とは、単に多くの生き物がいるというものではなく、昔からその土地に住んでいる生き物が、適切な密度で適切な関係を保ちながら暮らしていけるような自然環境に戻していこうとする試みです。

また、「生物多様性の復元」を行うに当たっては、地元の方々と共にこれを進め、地域の自然資源を豊かにすることが、ひいては、地域全体の質の向上につながり、結果的に「持続的な地域社会づくり」のしくみが構築されることを目指します。

この２大目標に向けて、プロジェクトがまず取り組んでいることは、「赤谷の森」の現状について科学的根拠をもって調べる、と言うことです。調べていく内容は「赤谷の森」の植物のこと、動物のこと、自然環境のこと、あるいは「赤谷の森」の歴史についてなど多方面にわたっています。

写真1）小出俣エリアの紅葉風景

このように多方面にわたる調査内容を、プロジェクトとして取りまとめていくために、「自然環境モニタリング会議」というものがあります。そして、一つ一つの調査は、内容ごとに具体的な検討を行うワーキング・グループ（WG）を組織して行っています。

現在活動しているワーキング・グループは、次の6つです。(図2参照)

1. 植生管理WG
人工林を自然林（天然林）へ戻す試験林を設置したり、赤谷の森の森林を詳細に調べて、生物多様性の豊かな森林とする方法を検討しています。

2. 猛禽類モニタリングWG
赤谷の森の豊かさの指標となる、イヌワシ・クマタカなどの大型猛禽類の暮らしを調べ、森との関係を把握します。

3. ほ乳類モニタリングWG
赤谷の森に生息するホンドテンやニホンザルなどの暮らしを調べ、生物多様性の豊かさとの関係を把握します。

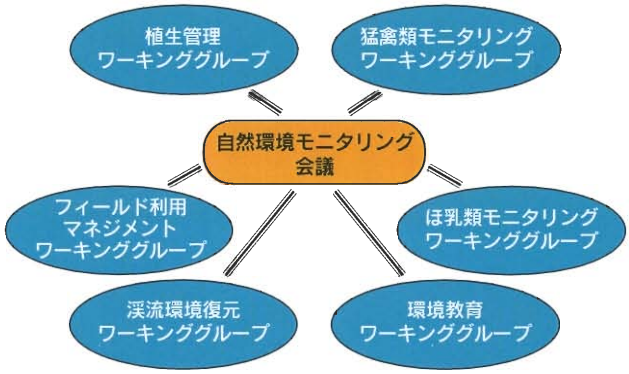


図2）ワーキング・グループ構成図

4. 環境教育WG
赤谷プロジェクトの環境教育の取組を企画・実行します。

5. 渓流環境復元WG
赤谷の森にある渓流環境を復元する方法や治山事業などについて検討しています。

6. フィールド利用マネジメントWG
赤谷の森を利用するにあたってのルールについて検討しています。

これらの活動を、プロジェクトの中心となっている3つの組織の関係者が、研究者・専門家とともに行っています。

さらに、プロジェクトにはサポーター制度というものがあり、プロジェクトに共感されたボランティアの方々が毎月第一土・日曜日にプロジェクトの活動拠点である「いきもの村」（みなかみ町相俣地区にある国有林の旧苗畑跡地を再整備した施設）に集まり、調査活動を行っています。

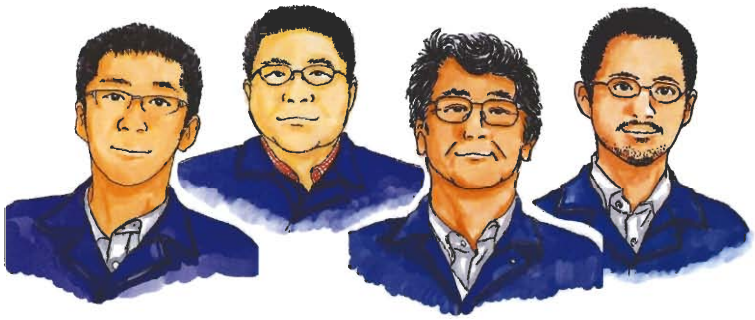
以上が赤谷プロジェクトの概略ですが、なかなか全体像を把握することは難しいかもしれません。では、具体的にどのような活動を行っているのでしょうか。次号からはそれぞれのワーキング・グループの活動状況などを報告しますので、ご期待下さい。

関係者紹介

このコーナーでは、赤谷プロジェクトの関係者（団体等）を順次紹介していきます。今回は、「赤谷森林環境保全ふれあいセンター」の紹介です。

「赤谷森林環境保全ふれあいセンター」は、赤谷プロジェクトを進めるにあたって、林野庁の中で中核的な役割を担うために、平成16年4月に設置されました。事務室は、沼田市鍛冶町の利根沼田森林管理署の一部に所在しています。

センターは、赤谷プロジェクト地域協議会、(財)日本自然保護協会と協働で、現地の国有林を管轄する利根沼田森林管理署や関東森林管理局と密接に連携しながら、赤谷プロジェクトに取組んでいます。それでは、赤谷センター職員の紹介をします。



赤谷センター職員
右から順番に中村所長、石坂、小川、山本

所長　中村隆史

通称ひげの所長。昨年の4月からセンター配属となりました。趣味はサッカーで、過去には、海外協力事業（JICA）でパラグアイ、パナマに併せて5年間駐在しました。家族4人と沼田市に住んでいます。

所員　石坂　忠

趣味は自然散策で、暇があれば地元の森林を歩いています。平成16年4月のセンター設立時に配属となりました。学生時代はウェートリフティングの競技選手でした。家族6人（うち犬1匹）とみなかみ町下牧に住んでいます。植生関係を担当しています。

所員　小川　純

出身地は、元気な名古屋です。趣味は映画鑑賞、森林散策、茶道（裏千家）です。中之条町に独りで住み花嫁募集中です。昨年の4月からセンター配属となりました。環境教育、広報関係を担当しています。

所員　山本道裕

出身地は、大阪です。趣味は食べ歩き、旅行です。平成16年4月のセンター設立時に配属となりました。猛禽類の調査関係を担当しています。

以上4名よろしくお願いします。

イベント等の紹介

●赤谷プロジェクト地域協議会では、猿ヶ京、永井、吹路地域の水源となっている「赤谷の森」の「ムタゴ沢（図1のエリア3）」の森林整備を検討しています。

今後は、ムタゴ沢の自然観察会やボランティアでできる森林整備等のイベントの実施を予定しています。

写真3）赤谷の森自然散策集合写真（大カツラの前で）

●「赤谷の森」には、国内希少野生動物種に指定されているイヌワシが棲んでいます。この調査のために6月1日から3日にかけて、全国から専門家が60人程度集まり、赤谷プロジェクトと合同調査を実施します。多くの方が「赤谷の森」と周辺地域を訪れますので、お知らせします。

●赤谷センターでは、平成18年10月に群馬県内の一般の方を対象に、「赤谷の森」を利用した自然散策を始めました。（写真3参照）ガイドによる植物の解説等を聞きながら「赤谷の森」の自然を満喫し大変好評でした。来年度はこのプログラムを拡張し、春、秋、冬の三回の実施を予定しています。

●来年度実施するイベント等については、内容や日程が決まり次第、ホームページや本誌でお知らせします。興味のあるかたは、最終頁の連絡先へお問い合わせください。

【編集部だより】

日本で初めて官民が協働して取組んでいる赤谷プロジェクトの活動を地元の皆様にお知らせするために、広報誌「赤谷プロジェクトかわら版」を発行していましたが、都合で休止していました。

今回新たに、「赤谷の森だより」として、内容を一新して再開し、皆様に親しまれる誌面づくりを心がけますので、よろしくお願いします。

ご意見、感想等は、最終頁の事務局・赤谷森林環境保全ふれあいセンターまで、ご連絡ください。

（赤谷の森のツツッペ）

■赤谷プロジェクトに望むこと

時間がないんだ森林は…

NPO利根川上下流連携支援センター副事務局長
岸　昌孝
東京都出身。昭和62年から沼田市在住。地域協議会会員

「やま（森林）でメシが食えるか」

かつて「環境でメシが食えるか」といわれていた時代がありました。21世紀に突入し「環境の時代」という言葉はそこかしこで耳にするようになり、そして昨今は「協働の時代」だとか「森林（もり）づくりの時代」という言葉が、市民の中で、あるいは企業の中でも広がっています。

ところで、わたしたちが住む地域がかかえる課題には、少子高齢化、人口の流出、合併の不満、ニーズの多様化、財政状況の悪化、環境問題、子育てをめぐる困難、格差社会、自然災害、ほか地域々々が抱えること等、数え上げればきりがありません。とりわけ財政状況の悪化、いわば地域の経済については共通の関心事でもあります。

話をもとに戻せば「環境」という言葉は、ここで言うところの「やま（森林）」に置き換えることができます。今更「やま（森林）でメシが食えるか」と…。

しかしながら、この森林づくりの時代にあって、そして協働の時代になって必要になってきたのは、これまで地元で"やま"に関わってきた人たちの古い記憶と、その時代に体に染みついた技のようなものを掘り起こすということです。つまりは「温故知新」が必要だということなのです。

「地域の信仰や文化は、サイエンス（科学）より先に進んでいた？」

地域の言い伝えを科学することは、科学を発展させるために必要なことというのは、最先端の科学者達が口々にする言葉です。

先人たちが永く利活用してきたモノやコトを、その当時と同じサイズ（モノサシ）で関わってみると、忘れかけていたことや、これまで気がつかなかったモノやコトが、風景や森からあぶり出されてきます。

たとえば温故知新でいえば、わたしたちが夜の森を歩くことを想像すれば、最近流行のLEDライトの眩しい光で道を照らすことを思い浮かべてしまいます。しかしながら輝かしい文明の利器は、ともすれば危険な方向へと導くことや、不安な夜道をさらに不気味なものにしてしまうこともままあるのです。そのまばゆい明かりに照らされた道を、瞳はそれを「標準」として認識してしまい、その反対に周囲を余計に暗くさせてしまうのです。そこに究極の古道具として「提灯（ちょうちん）」の登場を想像させてみましょう。このヒューマンスケールの明るさは、森をゆく人の足元を照らすだけでなく、持ち手の周囲をだいだい色のドーム状に包み込んでくれるのです。まぎれもなく、周囲を均一に照らすのはもちろんのこと、その三次元の世界を歩く体験は、安心を約束する驚愕の温故知新なのです。

「巨石」にまつわる話にはこんなものがあります。それを地域の神様とするところが全国各地にありますが、その神様から何かを感じるという人がいたとしたら信じられますか。科学的に調べるとその石から電磁波が出ているということがわかり、その仕組みも太陽光が当たる部分とそうでない部分の膨張の差から出る単純な音に似た共感覚があるかもしれない。その微弱な電磁波は周囲に何も影響しないかといえば、ただちには解りませんが言い伝えから答えをあぶり出せるかもしれないのです。

また、山の神 十二様の祠は、どこの森に入っても出会うことができますが、その一つひとつには異なった固有の存在の理由があります。それは、地域の資源を枯渇させない掟（ルール）であったり、集落の中でのコミュニティを円滑にする技であったりとさまざまなのです。眉唾に思われる方があらかたでしょう。されど現地を訪れてみて、ハートある案内人に言われれば、そう思わずにはいられなくなるのですから不思議なものです。

そして古い文化を見つめれば、驚きの知恵を知ることもさることながら、時には耳をふさぎたくなる、目をおおいたくなるようなことにも出会ったりしますが、この世を通り過ぎていった先人たちのバトンタッチがなし得た文明の上に、わたしたちは生かされているのだという事実は受け止めなくてはなりません。そうすることで、健全な新しい文化の創造（バージョンアップ）がはぐくまれていくのではないでしょうか。

「協働（コラボレーション）のキーパーソンは地域住民」

そういう意味では、赤谷プロジェクトの取り組みは、科学者や市民、そして地域住民との協働から何か新しいモノが生まれそうな場になりつつあります。そそる話は人の心を動かします。そしてその案内人（通訳者／インタープリター）には、やはり地域住民の参画は望まれるのです。協働の森林（もり）づくりとして「森林コミュニティビジネス」のモデルを大いに期待するところです。そして地域経済への波及も…。

平成17年2月26日（土曜日）読売新聞　夕刊

野生動物の生態を語りたい

国有林の面積は国土の三分の一！森林の中には多数の野生動物が生息している。

動物は生息地を追われ、数を減らしている。

国有林の中で、野生動物がどのような状態にあるのか、林野庁関東森林管理局内の

「赤谷の森」プロジェクトは、森林の整備と野生動物の保護を両立させるモデルを探る。

私たちは、自然と共存する道を探り、「野生動物の保護」に関する研究を進めている。

地元の人たちとの交流会を開いたり、ツアーを実施したりしている。

野生動物の生態を語りたい。

国有林の中で、野生動物が

「ツキノワグマ」。繁殖期の子を連れた母グマ（日本ニホンツキノワグマ研究会提供）

赤谷のいまから

人間に近づいてきた。

人間の生活圏に入ってきた。

人間の生活圏に入ってきた。

人間の生活圏に入って